72

『新刊針灸指南』について

寺川　華奈
日本鍼灸研究会

『新刊針灸指南』は，慶長年間に成立したと見られる著者未詳の鍼灸書である．本書については，阪本龍門文庫に二巻本（目録番号 484．web に画像掲載．以下，龍門文庫本），武田科学振興財団杏雨書屋（杏 5546.『臨床鍼灸古典全書』第 58 巻影印．以下，杏雨書屋本）に一巻本の，何れも古活字版が見られる．以下，龍門文庫本について報告する．

龍門文庫本は一冊本で，巻之上十三葉，巻之下二十一葉，都合三十四葉からなる．版高や魚尾，毎半板の行数と毎行の字数などの書誌的事項は，川瀬一馬著『日本書誌学之研究』所載の小汀文庫所蔵本『新刊針灸指南』の様態と基本的に一致する．ちなみに川瀬は書誌解説において「少くとも慶長十年以前の刊行に係るものであろう」と述べている．なお，杏雨書屋本は全二十四葉で，行数や字数は一致するものの，文章の細部に異同が見られる．また後半の内容を大幅に欠いている．

龍門文庫本の上巻は，「医宜通針灸薬」「経脈循環度数」「気血同行之説」「気血不同行之説」「経脈尺寸長短」「経絡続流」「経脈流注」「十二経気血多少」「定尺寸法」「定髪際法」「背部尺寸」「背部二行之寸法」「人無蔽骨之弁」「呼吸補瀉」「虚実補瀉」「陰陽補瀉」「厭按補瀉」「迎随補瀉」「栄衛針刺」「男女針刺浅深之弁」「四時浅深之針法」「井滎兪経合」「人身十五絡」「禁針穴二十二」「針刺不宜明解」「妊娠禁灸刺之経」「禁灸穴四十五」「秘伝穴（崔氏四花六穴，膏肓穴，腰眼穴，阿是穴）」の二十八項目で構成されている．医書及び鍼灸書からの引用部分は基本的に漢文であるが，著者自身の按語を含む注解部分は，医書などからの引用であっても時に漢字片仮名交じり文となっている．下巻は先ず「異穴同名之弁」と題して臨泣などの七穴を挙げ、次いで『十四経発揮』に酷似した人形図（経脈経穴図）十四図を掲げて，手太陰肺経から任脈に至る十四経の要穴百穴とその部位，主治證を記す．主治證は『医学入門』との共通点が多い．引用書目には『針灸資生経』『針灸大全』『医学入門』『脈訣刊誤』『神応経』などがあるが，最も多いのは『難経』の経文と注で，一難，二十三難，六十八難，六十九難，七十難，七十一難，七十二難，七十八難が引かれている．『難経』は，江戸初期の鍼灸において，極めて重視された医書の一つであり，様々な流派の鍼灸書にその影響を見ることができるが，本書もそうした風潮の現れと見ることができる．経文に附された注のほとんどは明の熊宗立のものであるが，七十六難「陰陽補瀉」の注解部分「陽気不足，陰気有余トハ，タトエハ胆不足，肝有余ナルトキニハ，先足ノ少陽ノ経ヲ補シテ後，足ノ厥陰ノ経ヲ瀉ス」云々は熊注には見えず，北宋・虞庶注「例令胆不足，肝有余，先補足少陽，而後瀉足厥陰也」と重なる．また栄衛と鍼法との関連に触れる七十八難は，その内容から「呼吸補瀉」「厭按補瀉」「男女針刺浅深之弁」の三項目に引かれており，著者の栄衛，補瀉に関する関心の高さが伺える．なお，本書の特徴として，「人身十五絡」を「大腸ヘンレキハイレツケツ　小腸シシヤウ心通里イ絡ホウリウ脾コウソン」のように臓腑の表裏の形式に組み直して，暗唱しやすい七五調で整理している点をあげておきたい．これは『針灸大全』などに見られる「手太陰絡為列缺．手少陰絡即通里．手厥陰絡名内関．手太陽絡支正是」のような，手足の三陰三陽の経脈別構成とは異なっいる．これは本書がなお中世的な蔵府重視の姿勢から脱却していないことを表しているのかもしれない．

本書は，日本の江戸初期における鍼灸法を伺う資料として貴重である．